いくぜ！

一之貝　特定非営利活動法人
「UNE（ウネ）」

家老（カロウ）　洋（ヒロシ）さん

Profile　生産者紹介

古民家を利用した「UNEHAUS（ウネハウス）」を拠点に、稲作160㌃、畑作20㌃で農福連携を行った活動を行っている。また、福祉市民体験農園の管理なども行う。

農村を通して地域の再生・発展へ 農福連携で課題を解決！

誰もが安心知して暮らせるユニバーサル社会の構築を

農園芸や福祉活動を通して、障がい者支援や高齢者の支援を行う一之貝の特定非営利活動法人「UNE」。U＝ユニバーサル、N＝農園芸、E＝越後の頭文字をとって命名したもので、障がいのある人や高齢者、健常者など全ての人間が安心して暮らせる「ユニバーサル社会」の構築を理念に平成23年に設立されました。

代表の家老洋さんは、大学で農業土木を学び、ドイツに留学。帰国後、測量の仕事をしながら市議会議員を務めていましたが、平成16年に発生した中越大震災をきっかけに社会的立場の弱い人たちに向けた居場所づくりを始めました。

家老さんは「中越地震では、マスコミや行政は災害の現場や避難所にしか注目しませんでした。障がい者や介護が必要な人たちが家から動けずに、救援物資や暖房もない状態で、自宅で過ごしていることに気付いたことがきっかけです」と語ります。

農村と福祉の共存モデルを作る

現在UNEでは、一之貝の棚田を利用したコシヒカリやもち米、どぶろく「雪中壱之界」に使用される酒米「亀の尾」などの栽培や、信濃川の河川敷の畑を利用した福祉市民体験農園で、ジャガイモやダイコンなどの栽培を行っています。他にもリラックス効果のある葉樹「クロモジ」を使用したお茶やミストの販売に力を入れており、多様な事業を展開しています。

「これまでの障がい者の仕事は、やりがいを感じにくいものが大半でした。様々な作業があるのも、自分が得意なことやできることを見つけてもらい、生きがいを持ってもらうためなんです」と話す家老さん。

今後の目標について家老さんは「農村と福祉が共存するモデルを作ることが目標です。様々な機関と連携しながら一之貝という地から、私たちの活動を全国に向けて発信することで、中山間地の現状を解決するための架け橋になりたいです」と意気込みを語ります。